

# “北東アジア”はどのように、とらえられてきたか

## 中 見 立 夫

はじめに

1. “北東アジア”か、“東北アジア”か？
2. “Northeast Asia”は、どのようにして「世界図」のうえに登場したか
3. ロシア人、アメリカ人は“Northeast Asia”をどうとらえてきたか
4. 戦前期の日本人学者がとらえた“東北（北東）アジア”
5. “北東アジア”という空間の特殊性

### はじめに

本稿は、2003年9月28日、島根県立大学において開催された、「モンゴル学シンポジウム——モンゴル学の再構築と北東アジア学としての位置づけをめざして——」での報告を補訂・文章化したものである。島根県立大学は「創立以来、北東アジア学の創成をめざして努力してきた」<sup>1)</sup>。今回のシンポジウムも、副題から推察されるように、「モンゴル学」を、その「北東アジア学」構想のなかで、どのように位置づけるか、検討することに組織者の意図があった。

「地域」をどうとらえるかに関して、矢野暢は、

それがあたかも現実的所与として存在するかのように客観的な定義を下すことができずれば、その反面で、きわめて恣意的なくくり方のうえにたつてある人為的な空間をつくり出し、それを「地域」と呼べるという面もある<sup>2)</sup>。

と指摘している。“北東アジア”ないしは“東北アジア”という「地域」は、いまや所与の「現実」として、日常生活の様々な場面で眼にふれる一方で、ほかの広域地域概念と同様に、いや、それ以上に、論ずるものの立場と目的によって、空間的ひろがり異なることは、特徴的ともいえる。筆者は、歴史的にみて“北東アジア”という「地域」がどのように登場し、認識されてきたかを跡づけることによって、島根県立大学が構想する「北東

アジア学」に対して、いささかなりとも参考意見を提供したい<sup>3)</sup>。

## 1. “北東アジア”か、“東北アジア”か？

現代日本語には、“北東アジア”と“東北アジア”のふたつの表現が並存しているが、もともとヨーロッパ諸語からの、英語を例にとれば“Northeast Asia”の訳語である。ヨーロッパ諸語と東アジア諸語では、方位観についての認識のちがいが、言語表現に現れている。ヨーロッパ諸語においては、まず北対南の対称軸があり、ついで東西の区分がくる。これに対して、東アジア諸語では、東西の軸のあとに南北の区分が存在する。したがって、日本語には「東西南北」、漢語では「東南西北」という表現はあるものの、ともに「北南西東」との用例はまずない。それゆえに、もし「正しい」日本語表記というものがあるとすれば、“東北アジア”の方が慣用表現としては適切といえよう。事実、「幕末における語学の天才」といわれた馬場貞由は、後述するニコラース・ウイツェン (Nicolaes Witsen) 著『北と東のタルタレイエ』(*Noord en oost Tartaryen: behelzende eene beschryving van verscheidene Tartersche en nabuurige gewesten, in de noorder en oostelykste deelen van Aziën en Europa*) の1785年刊第三版を抄訳するに際して、「東北韃靼諸国図誌蝦夷雜記訳説」[下線は中見]としている。また漢語、朝鮮語、モンゴル語においては、いずれも「東北アジア」という表現は存在するが、「北東アジア」とはいわない。一方“Southeast Asia”については、日本語ではおおむね「東南アジア」と訳され、「南東アジア」と直訳するのは、外務省アジア太平洋局所轄南東アジア一課・二課にみられる名称を別として、まず、みあたらない。「南東アジア」という表現には、あまりに逐語訳的な違和感をいだが、「北東アジア」に対しては、そのような抵抗感がないとすれば、それは「北東」という音が、ひとびとに受け入れやすいという事情があるからだろう。

しかし、東西が最初に来て、ついで南北が続くという方位観が、東アジア諸語といっても、まったく言語系統が異なる、日本語やモンゴル語、朝鮮語と漢語のあいだで共有されている事実は、それが言語の問題ではなくて、文化の問題とみなすことができる。だが上記した、東アジア諸語とヨーロッパ諸語の言語表現にみられる異同が、政治的イシューによっては、重要なニュアンスの差異をふくむ場合がある。現代国際社会がかかえている、おおきな問題として「南北問題」に関心が払われるようになって久しい。この「南北問題」への関心の端緒は、ブランド元西独首相が国連事務総長に宛ててだした「南北問題」に関する報告、South and North: the Strategy for Survival [下線は中見] にもとづき1981年に開催された、日本でいう「南北サミット」にはじまる。

日本語でいう「南北問題」は、「南の諸国」(＝発展途上国)と「北の諸国」(＝先進国)との関係、そして両者の対抗と対話をさすのであろうが、「南北」ということにより、「南」の立場、あるいは自律性に配慮した含意をもつ。また、この問題を最初に取りあげた、ブランド報告書の英語原題にもおなじ考慮がみられる。ところが、日本語では「南北問題」

“北東アジア”はどのように、とらえられてきたか

となるが、もともとの英語表記は“North-South Issue”で、「南北サミット」も“North-South Summit”であり、したがって直訳すれば、「北南問題」である。日本語表記にみられる、「南」への配慮はうかがえない。

## 2. “Northeast Asia”は、どのようにして「世界図」のうえに登場したか

「世界地図」は地図製作者の世界観、あるいは地域認識を投影したものである。“北東アジア”が「世界図」のうえに登場したのは、いつのことであろうか。この分野では、船越昭生による、一連のすぐれた「北東アジア図」研究<sup>4)</sup>が多くの示唆を与えてくれる。しかし、船越が検証する、「北東アジア図」とは、実は“北東アジア”つまり“Northeast Asia”という名称で、当該地理空間を製作者が知覚して描いたものではなく、実際は「タルタリア図」を中心とした研究であることに注意しなければならない。

「タルタリア図」は、はじめての世界地図帳である、アブラハム・オルテリウス『世界の舞台』（1570年）においても、すでに収録されている。当該地図帳は、全53葉、つまり(1)世界図、(2)アメリカ図、(3)アジア図、(4)アフリカ図、(5)～(45)ヨーロッパ図および関連図、(46)ロシアおよびタルタリア図、(47)タルタリア図、(48)東インド図、(49)ペルシア図、(50)トルコ帝国図、(51)パレスチナ図、(52)小アジア図、(53)バルバリア図で構成されている。「タルタリア」は「アジア図」のなかにもふくまれるが、「ロシア」の延長でも描かれること（第46図）、およびそれ自体が独立した一図（第47図）となっていることに注目しなければならない<sup>5)</sup>。

中世ラテン語形の「タルタリア (Tartaria)」、英語形の「タターリ (Tartary)」、ないしはフランス語形では「タルタリ (la Tartarie)」、オランダ語形の「タルタレイエ (Tartarye)」とは、ヨーロッパ人が作成した世界図においては、シベリアと中央ユーラシアを舞台とする、遊牧・狩猟民族の生活空間をさした。やがて1689年のネルチンスク条約、1727年のキャプタ条約の締結で、露清国境が画定することによって、たとえば1736年のデュ・アルトによる記述 (J.B. du Halde, *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*) をみれば、「タルタリ」は「ロシアのタルタリ (la Tartarie russe)」と「シナのタルタリ (la Tartarie chinoise)」に分けられている。さらに、「シナのタルタリ」は「西タルタリ (la Tartarie occidentale)」ないしは「モンゴル人 [あるいはモンゴル族 (terres des Mongols ou Mongous)] の土地」と、「東タルタリ (la Tartarie orientale)」すなわち「満洲人 [あるいは満洲族] の土地 (terres des Mantcheoux)」に二分される<sup>6)</sup>。

このような状況のなかで、ニコラース・ウィツェン著『北と東のタルタレイエ』（初版1692年、第二版1704年、第三版1785年刊行）が出版された意義は、きわめておおきい。同書は「当時の北東アジア知識の集大成」と評価され、その「北東アジアの地理像は、18世紀初頭より中葉にかけての、西ヨーロッパにおける世界地図の構想において、重要な一

支柱」となった。ウィツェン自身は“北東アジア”ということばを使っていないが、のちの“北東アジア”地域像構築のさきがけとなったのは事実である。『北と東のタルタレイエ』は事情があって、第一版・第二版はほとんど普及することはなかったが、第三版は徳川幕府が入手し、馬場貞由が同書にもとづき、「北東アジアの輪郭を決定すべき最後の課題、「韃靼海峡問題」解決の為」、1809年に『東北韃靼諸国図誌蝦夷雜記訳説』をまとめたことは前述したとおりである<sup>7)</sup>。

しかし、ヨーロッパ人作製地図において、あるいはヨーロッパ人の世界地理認識のなかで、英語表記では“Tartary”という地域は、おそらくは19世紀のなかごろには消滅する。前述したように、ロシアと清のあいだには「国境」が存在していた。ゆえに「国境」を挟んで、「ロシアのタルタリ」と「シナのタルタリ」が並存していた。しかしロシア帝国は、次第にシベリア統治を強化し、行政機構を整え、このようなロシアによる実効支配の拡大に連動して、作製される「ロシア帝国図」も精緻化していった。さらに、ロシアは1858年の愛琿条約、翌59年の天津条約追加条約によって、従来はヨーロッパ人から「シナのタルタリ」といわれた地域のうち、沿海州など、広大な領土を清朝から獲得した。清領土へのヨーロッパ列強の侵略と清朝政権の弱体化、一方、清朝政権内部では漢人官僚が台頭し、清朝が「中華帝国」化していく過程のなかで、ヨーロッパで作成される地図から“Tartary”が消えてゆく。

これと同時に、アジア図のなかで、“Tartary”の東北（北東）部分、わけても樺太（サハリン）と沿海州あたりの一帯が、最後まで残された空白部分、つまり未知の空間であったことへも注目しなければならない。この地方を、ロシア、そして日本の探検家が調べ、地図を作成した。ロシア側は、その勢力東進とともに、地図を精密なものとしたが、日本はロシア人の日本海海域への出現に対して、「北辺」警護の観点から、当該地方の地理的調査をおこなった。日本は、当時の地図最先進国、オランダ、そして清朝からの情報も加え、当時としては、最も正確な地図を完成させた。さらに、1809年に高橋景保が作成した「日本辺界略図」は、シーボルト経由でヨーロッパへと伝わる。このような過程のなかで、副産物として「満洲 (Mandschurei)」という地域が、はじめ日本人、ついで欧米人のあいだで誕生したことに関しては、以前に論じたことがある<sup>8)</sup>。

アジア大陸の中央部から北部に渡り、“Tartary”という、遊牧・狩猟民の広大な生活空間が存在することは、世界地図帖の誕生とともに、ヨーロッパ人には知られていた。しかし、初期においては輪郭もはっきりせず、その「東北」部も存在していなかった。次第にアジアの東北部が明確に地図上に描かれるようになるが、やがて“Tartary”ということばは消滅する。しかし“Northeast Asia”ということばが、普及した地理概念となることはなかった。

### 3. ロシア人、アメリカ人は“Northeast Asia”をどうとらえてきたか

実際のところ、“Northeast Asia”という地域名称が、いつごろから使われだしたかははっきりとはしない。しかし、Charles Anthony Schott, *On the magnetic observations of Vitus Ivanovich Bering on the coast of northeastern Asia during his first expedition 1725-1730* (Washington: Gov't print. off., 1892) なる文献が、書誌にあげられているところをみれば、19世紀の末には、すでに用例があった。ただ、第二次世界大戦以前においては、英語でいう“Northeast Asia”、ないしはロシア語での相当する表現は、きわめて限定的な範囲と意図のもとに使用されていたとみられる。より正確に言えば、“Northeast Asia”ということばで、地域を設定し、説明しなければならない状況も、そして必要性が積極的には存在していなかった。

ここで注目すべきは、上記ショット著作がさす、“Northeast Asia”とは、ロシア帝国ウラル以東の「アジア」地域、つまりロシア語の“Азиатская Россия”中の「北東（東北）部（Северо-Восток）」、とくに太平洋・北極海周辺域を意味していることである。したがって、この用語法では、現在の中国東北地域やモンゴルなどは入らない。しかも、地域へ対する関心というよりも、そこに生活するひとびと、とくに“Paleo-Siberian”ないしは“Paleo-Asian”への注目が、ロシアやヨーロッパ人民族（誌）学者のあいだでおこった。このようなロシア人研究者たちの当該地域に対する認識は、のちの時代へも継承された。ロシア帝国崩壊後、東洋学者ガパノヴィッチ（И.И.Гапанович）は、亡命先の中国で『北東アジアにおけるロシア／*Россия в Северо-восточной Азии*』（北京、1933年）という著作を出版した。その冒頭において、「アジア北東部（Северо-восток Азии）はカムチャトカ州を意味し、そのなかにギジンスコ・オホーツク沿海、カムチャトカ半島、チュコトカ・アナディル地方をふくみ、1,078,977平方露里にわたる」（同書第一部、1頁）と指摘している。この“Северо-Восток Азии”という語は、今日のロシア連邦でも地理的述語、民族学上の用語としては使われるものの、あまり普及した概念ではない、ともいわれる。

一方、英語圏というよりも、アメリカ合衆国において、学術レベル、あるいは地域戦略論的視座から、“Northeast Asia”という「地域」を構想しようとしたのは、ロバート・カーナー（Robert Kerner）にはじまる、といっても過言ではない。以下、このカーナーの“北東アジア”研究については、スティーヴン・コトキン（Stephen Kotkin）による、詳細な論考<sup>9)</sup>があり、これに依拠すると、カーナー（1887-1956）は、1931年から41年まで、カリフォルニア大学バークレー校において、“Northeast Asia Seminar”を開設した。カーナーはもともとロシア・スラブ研究の出身であったが、このようなゼミナーを組織した意図は、前述した“Азиатская Россия”への注意を喚起すること、およびロシア研究とアジア研究を結合させることにあった。かれのとらえる“Northeast Asia”とは、ロシア、中国、日本という三大勢力の角逐、勢力浸透の“frontier”であり、このような認識の背景に

は、アメリカ史の文脈、ないしはアメリカ人にとっての“frontier”という問題が関連していたと考えられるが、同様の発想は、カーナーよりややあとの世代で、内陸アジア研究で成果をあげたオーウェン・ラティモア (Owen Lattimore) にもみられる<sup>10)</sup>。このような視点に立つゆえに、カーナーは、文化的表象概念としての“East Asia”に対して、ロシアをもふくむ“Northeast Asia”を用いたという。ゼミナーにおいて、当初、扱おうとしたテーマは、

- (1) The history of eastward expansion of Russia to the Pacific from its origins to the present time and analysis of Russia's recent position in Asia and on the Pacific.
- (2) The problem of China in its relation to Mongolia.
- (3) Manchuria. Japan's policy in Northeastern Asia.
- (4) The place of Northeastern Asia in the problems of the Pacific Basin.

であった。ゼミナーの具体的成果としては、

Robert Kerner ed., *Northeastern Asia, a Selected Bibliography: Contributions to the Bibliography of the Relations of China, Russia, and Japan, with Special Reference to Korea, Manchuria, Mongolia, and East Siberia, in Oriental and European Languages* (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1939).

という書誌がだされているが、その表題からカーナーの構想した“Northeast Asia”の地理的範囲と意図を看取することができる。さらに、ロシア史分野からのアプローチとしては、カーナー自身が、*The Urge to the Sea: The Course of Russian History* (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1942) を刊行し、そして同僚であった、Yoshi Saburo Kunoによる日本史分野からの成果が、*Japanese Expansion on the Asian Continent: A Study in the History of Japan with Special Reference to Her International Relations with China, Korea, and Russia* (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1937 & 1940) として出版されたが、中国史分野からの報告として予定された、バークレーの卒業生で中国へ帰国し、南開大学に奉職していた、Lin Tung-chiによる“China and Her Borderland”は日中戦争勃発のため執筆されずに終わった。

英語圏、とくに米国とイギリスにおいては、“Southeast Asia”という地域名称が、第二次世界大戦期の、連合国側の対日反攻作戦行動区域を契機として、汎用されるようになったとは、通説的にいわれることであるが<sup>11)</sup>、“Northeast Asia”も戦後になって、ある程度まで普及、使用されるようになったといえる。だが今日では、“Southeast Asia”、つまり日本語では「東南アジア」という地域が、英語圏、そして現地ASEAN諸国のみならず、世

界において、ひとびとのあいだで、明確にその空間的範囲が認識されているのに対して、“Northeast Asia”は、英語圏においても、使用する側の意図と目的によって、さす範囲が異なる。

たとえば、米国学者を中心とした、英語圏最大のアジア研究学術団体である、Association for Asian Studies (AAS)は、研究対象とする「アジア」地域を四分割して、“China and Inner Asia Council (CIAC)”、“Northeast Asia Council (NEAC)”、“South Asia Council (SAC)”、“Southeast Asia Council (SEAC)”を置いている。この“Northeast Asia Council”が担当するのは、“Korean Studies”と“Japanese Studies”であって、したがって中国東北地域に係わる大会分科会、論文、書評などは、原則としてCIACが分担する。これは現実的な運営上の必要性からの判断と理解できる。すでにAASにおいては、南アジア研究者のSAC、東南アジア研究者によるSEACは、かなりの独立性と統合性をもったグループとなっているが、それ以外の地域に関する研究者状況をみれば、相当数の研究者を擁する“Chinese Studies”と“Japanese Studies”、さらに近年、非常に充実しつつある“Korean Studies”に分類される学者、そして相対的には研究人口の乏しい“Inner Asian Studies”に属する研究者が加入しているが、これらをたとえば一本化して“East and Inner Asia Council”とした場合、SAC、SEACと比較して、あまりにもおおきなCouncilになりすぎる。分けるとすれば“China and Inner Asia Council”と、“Korean Studies”および“Japanese Studies”を統合したCouncilになるのであろうが、その場合、名称としては“Northeast Asia Council”しかないという考慮であろう。ちなみに、“West Asia Council”あるいは“Middle East Council”が存在しないことが注目されるが、これは米国で「アジア研究」が発展したのは第二次世界大戦後のことであり、もともと「中国研究」と「日本研究」が主体であったこと、そして「中東研究」ないしは「西アジア研究」は、AASと別個の学術団体を組織していたという事情による。

AASにおいては、NEACは韓国・朝鮮研究と日本研究を担当し、したがって“Northeast Asia”とは、地域としては朝鮮半島と日本を意味することになるが、すくなくとも現在の米国では、“Northeast Asia”とは、きわめて限定された国際的なイシューを説明するときに使われる傾向が多いという。ひとつは朝鮮半島をめぐる安全保障と国際関係、もうひとつは朝鮮半島、中国東北、ロシア極東地方を中心とした経済開発と国際協力、このような問題を論ずるときに、“Northeast Asia”という空間が想定される。ちなみに、朝鮮半島をめぐる政治情勢を、“Northeast Asia”の枠組みのなかでとらえるのは、戦後の米国务省が“the Office of Northeast Asian Affairs”を設置したことにはじまるといわれる。ただ米国でも、文化人類学研究者たちの“Northeast Asia”への視角は異なり、前述したロシア語の用法“Северо-Восток Азии”に近い形で、民族誌学上の問題を依然として論ずることがある。さらにロシア史研究者たちは、かつてのカーナー的視点に立ち、つまり東アジア研究とロシア研究を結合させることを考えつつ、“Northeast Asia”を意義づけしようとする動

きもみられる。

#### 4. 戦前期の日本人学者がとらえた“東北(北東)アジア”

戦前の日本では、「東北アジア」、「北東アジア」という地域名称は、使われることがまず稀であった。この点、英語の“East Asia”、ドイツ語の“Ost Asiens”に由来する、「東アジア」が明治期から「東亜」として頻用され、しかも「東亜同文」にみられるように、アジア主義的連帯の含意をもつ語としても使われたのとは異なるし、また英語の“Far East”、フランス語の“d'Extreme-Orient”の訳語である「極東」と比べても、用例はほとんどみいだせない。

そのようななかで、“北東アジア”あるいは“東北アジア”ということばを使っている、最初の例外的ともいえるべき日本人が鳥居龍蔵であった。1917年には、論文「東北亜細亜に於ける無言貿易に就て」<sup>12)</sup>を発表しているが、鳥居が対象として取りあげているのは、「古シベリア族 (Paleo-Siberian)」、つまり「たとえば北海道、千島、樺太のアイヌ、それからカムチャダールとかコリヤーク、チュクチ、ユカギール、エスキモー、ギリヤークといふものまで、人種学的に互いに位置、系統の分からぬ所のものを包含したものです。そうしてその住まって居る場所は主として遠い島々ないしはアジアの沿岸地方」であり、そのような「東北方アジアに於いての最も特色」のある、「無言貿易 (Mute trade)」について論じている。

ついで1924年には、『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』<sup>13)</sup>を上梓しているが、これは「大正八年に試みた東部シベリア及び同十年に試みた北樺太の人類学、人種学、考古学上の調査旅行の日記」をもとにしている。また、同年に刊行された『日本周囲民族の原始宗教』<sup>14)</sup>の冒頭「東北亜細亜民族の宗教」において、「東北方アジアの民族は、通常これを二つに分かつことが出来る。すなわち一は古シベリア族、一は新シベリア族」と指摘している。さらに1936年刊行の『滿蒙其他の思ひ出』<sup>15)</sup>では、「東北方アジア民族の将来」として、「現今の形勢は、蒙古人のみならず、かの樺太北方からアムール河畔、その他シベリア一帯に居住するツングース人を始め、シベリアのフィン人、シベリア及び中央アジアのトルコ人等のアジア民族もまた赤化の国人となった。…[中略]…この有様で進んで行くと、我が東北方アジア大陸においては、正しい民族的な色彩をもつ民族はなくなってしまうであろう。嗚呼！」と嘆いている。

以上の記述をみると、鳥居にとって“東北アジア”ないし“北東アジア”とは、人種・民族学的概念から派生するものであって、現実的な地理概念としては使われていないことが分かる。明らかにヨーロッパ語人類学文献からの影響で使っており、また前記したロシア人の用法にも近い。鳥居がしばしばフィールドワークの場とした、「蒙古」や「満洲」は、一応、かれのいう“北東(東北)アジア”にふくまれるべきものであったろうが、直接これらの地域や民族集団に言及するときには、その語は登場しない。



“北東アジア”はどのように、とらえられてきたか

戦前の日本では、政官界、軍部、実業界、ジャーナリズムにおいては、“北東アジア”ないしは“東北アジア”という概念を必要としていなかった、あるいはその語を用いて説明すべき状況が存在しなかったといえよう。学界においても状態はおなじであって、河内良弘編『日本における東北アジア研究論文目録、1895-1968』（天理：編者発行、1972年）は、当該期間に出版された、“東北アジア”史関係研究論文を収録した労作だが、これを丹念に追うと、こと1945年までは、前記鳥居と、西村真次「北東亜細亜民族の宗教思想」『東洋』第25巻第2・3冊（1922年3月）、山本幡男『北東アジアの諸民族』（中央公論社、1941年）、そして後述する三上次男論文のほかに、“東北（北東）アジア”を表題に掲げる著作・論文が、みあたらないことへ注目しなければならない。

山本の著書は、満鉄広報課が編者となった「東亜新書」の一冊として刊行されているが、その「総説編」冒頭において、

北東アジア——東は大陸の極北東にあたるベーリング海峡のデジネフ岬からウラヂヴォストークに至るまで、ベーリング海、オホーツク海、日本海などの太平洋諸海に臨み、北は気候寒烈な北氷洋に洗はれ、西は略々エニセイ河によつて西部シベリアと隣り、南は大体アルタイ山脈、サヤン山脈、ヤブノヴォイ山脈の一部、黒龍江（アムール河）において外蒙古、満洲と境を接する一帯の歴大な地域を、我々はここで北東アジアと呼ぶことにしよう<sup>16)</sup>。

と、明確に“北東アジア”の地理的範囲を設定している。山本のさす“北東アジア”とは、当時のロシア人、ヨーロッパ人民族学者・地理学者の用法とまったく同一であり、「満洲」や「外蒙古」はふくまれず、論じたテーマも当該地域における「民族」の問題であった。

一方、東洋史・考古学者、三上次男は戦前期には、朝鮮半島から中国東北部で考古学調査に従事するとともに、金朝を中心とした文献史学的研究でも成果をあげていた。三上は、「古代東北アジアの諸民族、特に挾婁族について」『帝国学士院報告会記録』第6号（1942年）、「北東亜細亜に於ける毒矢使用の習慣に就いて」『民族学研究』第9巻第3号（1943年3月）、「北東アジアの文身国」『ひのもと』第6巻第5号（1943年5月）を発表している。戦前の段階では、三上がとらえる“東北（北東）アジア”とは、鳥居とほぼ同様に、人種・民族学的概念に付加されるものであって、“Paleo-Siberian”に属すると推定される集団、「挾婁」ないしは「文身国」が考察の対象であった。三上も鳥居とおなじく、ヨーロッパの民族学にも通じており、さらにロシア語による民族誌にも注目していた。

やがて日本の敗戦と戦後国際情勢の変化によって、三上はフィールドワークの場を失った。それゆえに西アジア、さらには東南アジアへと活動の舞台を移すが、その過程で、従来の研究業績をまとめる形で、まず『満鮮原始墳墓の研究——東北アジア史研究第一——』（吉川弘文館、1961年）、ついで『古代東北アジア研究——東北アジア史研究第二——』

(吉川弘文館、1966年)を出版しており、前掲三論文は補訂のうえ、後者に収録されている。ところが、三上の場合、戦後においては、「東北アジアの地域概念を、だいたい東経一二五度以東、すなわち北方はレナ河、南方は遼東山系の地域に限る」<sup>17)</sup>と、あきらかに地域としてとらえ、「古代東北アジアには、この地域を発展にみちびいたいくつの中軸の地があった」として、「その一は満洲地域の遼東半島地方であり、その二は朝鮮半島の大同江下流地方である」と指摘している。つまり三上の学問的関心は、一貫して前近代に限定されるものであったが、その認識する“東北アジア”は、かつての「満鮮」地域を中心とすることによって、地域として位置づけられるようになった。さらに「東北アジア史の動きには、アジア史の一つの中心である中国史の動向の豪壮さはないが、なおこれが東アジアの歴史の展開に重要な役割を演じたことは、見遁すことのできない事実」と述べていることも注目される。

ちなみに、三上とともに池内宏を恩師とし、相前後して東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業した考古学・東洋史学者、江上波夫も、戦後は三上と同じような学問上の軌跡をたどるが、古代ツングース系民族を研究する三上が“東北アジア”ということばで、自分の研究対象地域を名づけたのに対して、古代テュルク・モンゴル系民族史を専攻する江上は、ヨーロッパの学術雑誌名からヒントをえて、“ユーラシア (Eurasia)”を取りあげ、『ユウラシア古代北方文化——匈奴文化論考——』(京都：全国書房、1948年)を出版している。“ユーラシア”は、戦前の日本においても「欧亜」として訳されることはあったが、敗戦直後にあって片仮名で「ユウラシア」という語を用いるのは斬新であった。むしろ江上が“ユーラシア”を採用したのを見て、三上が“東北アジア”を自己の研究のうえで再定義したのかもしれない。

一方、戦後50～60年代においても日本社会一般では、依然として“北東(東北)アジア”は、あまり普及した地域概念ではなかった。戦前においては、朝鮮は日本の植民地、つまり「帝国」領内にあったので、当然のことながら、外務省には担当者はいたものの、所轄課はなかった。講和をまえにした1951年、アジア局が復活し第一課が朝鮮半島を担当することとなり、さらに1958年、第一課は「北東アジア課」、第二課は「中国課」、第三課が「南東アジア課」、第四課が「南西アジア課」と改称された<sup>18)</sup>。当時、日本と韓国のあいだに国交はなかったが、朝鮮半島担当課を「北東アジア課」としたのは、米国国務省の用例を踏襲したと考えられるが、「朝鮮(半島)課」とすると韓国から反発が予想され、国交樹立の支障となり、さりとて「韓国課」とすれば、あたかも大韓民国のみを対象とし、北朝鮮からの非難を惹起しかねない、との懸念を回避する意図があったと想像される。

## 5. “北東アジア”という空間の特殊性

現在の日本では、英語でいうならば“Northeast Asia”からの訳語で、“北東アジア”と“東北アジア”という、ふたつの同義異語が並存するが、その地理的範囲が曖昧であり、

共通の理解が存在しないことこそは、特色でさえある。しかも、学問的レベルでは、ディシプリンにより、「地域」のとらえ方が異なる傾向がある。日本の学界における用例をみると、まず歴史学、とくに前近代史研究者のあいだでは、“東北アジア”という用例が多い。中国東北地方、朝鮮半島、東シベリア・ロシア極東をさし、したがって日本は基本的にはふくまれず、おもにツングース系民族の歴史的文化圏を意味する。戦前期の「満鮮史」という表現を言い換えたにすぎないという批判もありえようが、それはかならずしも問題の本質を突いていない。戦前の「満鮮史」は、「満洲史」と「朝鮮史」とを単にあわせたものであったが、戦後の日本における歴史学者の理解においては、「朝鮮史」は、ひとつの独立した領域、ないしは「東アジア史」の一部をなすものである。これに対して、「東北アジア史」という視点は、ツングース系民族の古代世界を中心とした歴史的活動をとらえたものであって、したがって、「中央ユーラシア史」、「東アジア史」、そして「朝鮮史」とも一部、重複しながらも並立するものである。それゆえに「朝鮮民族」なるものの歴史的形成に関する問題とも係わり、のちの時代にあっては、たとえば入関以前の時期における、後金と朝鮮王朝の関係は、「東北アジア」の問題ととらえられる。

一方、近代史研究者にとっては、これも“東北アジア”という場合が圧倒的に多いが、前述したカーナー的視点から問題が設定されている。つまり、日本、ロシア・ソヴィエト、そして中国といった勢力の角逐の舞台としてとらえられ、具体的な地理的範囲としては、中国東北地方、朝鮮半島、さらに東シベリア、ロシア極東地方を中心に、華北、モンゴルの一部や、アクターのひとつである日本もふくまれる。ただ、日本、中国、朝鮮半島の近代史を、広域的な「東アジア史」ととらえるならば、近代世界における“東北アジア”とは“東アジア”の周縁地域、ないしは“東北アジア”の“東アジア”周縁化といった現象が指摘できる。

このような歴史学者の理解に対して、地理学、文化人類学、考古学研究者たちにおいては、“北東アジア”という用例が多く、もともとは戦前の鳥居龍蔵や三上次男のように、“Paleo-Siberia”の民族誌的研究において用いられていたが、最近では、前近代史研究者の用法に近づき、アリューシャン列島を端とするアジア大陸の東北部、朝鮮半島もふくむ地域をさし、前近代時期における民族分布、言語系統、あるいは考古学的問題などを説明する際に使われる、地理概念として用いられる傾向が強い。

一方、国際政治研究者、開発論研究者の“東北アジア”ないしは“北東アジア”に関する用法は、前述した米国学界での用例と一致している。国際政治研究者にとっては、朝鮮半島をめぐる政治力学を説明するときに、“北東アジア”という場が設定される。たとえば、現在おこなわれている、「北朝鮮の核開発問題をめぐる六カ国協議」の当事者は“北東アジア”の安定に責任がある、といった形で説明される。このような場合は、韓国・北朝鮮と、隣接する関係諸国、つまり日本、中国、ロシア連邦、およびアメリカ合衆国との関係を意味するが、あくまでも“北東アジア”の主体が朝鮮半島であることは、興味ふか

い<sup>19)</sup>。したがって、日中関係と米国、日中関係とロシア、という場合には“東アジア”の問題としてとらえられる。

上記した政治あるいは国際関係的視点からの地域設定は、つねに開発論的アプローチからの課題と連動している。つまり“北東(東北)アジア”地域を安定化させるためには、地域的な経済協力が不可欠であり、まず経済協力を推進することによって、ついで政治的な安定を高め、共存を可能にしようという観点である。開発論研究者の場合、具体的には、ロシア極東、中国東北、北朝鮮を場とする地域的な国際経済協力関係、たとえば図們江開発問題などをいうとき、“東北アジア”が使われるが、この場合、関係諸国のなかにはモンゴルも入る。“東アジア”のなかの「地域」的な経済協力ではあるものの、モンゴルやロシアの一部地方も対象に入り、国家としては、ロシア連邦、モンゴル国も関与するゆえに、“東北アジア”という地域が設定される。

“アジア”に関するほとんどの「地域」とは、そこに生活するひとびとが歴史的な過程でうみだしたものではなく、“アジア”の外部世界において創生された概念である。しかも“北東(東北)アジア”に関しては、論ずるものの課題によって変化する空間でもあった。ただ注目すべきは、おおむね、ひとつの文献・論文のなかで、“東アジア”と“北東アジア”が並存することがまずないことである。その理由としては、それぞれの設定基準が異なること、そして朝鮮半島については、いかなる学問領域の研究者であれ、両方の「地域」に属していると認めざるをえないからであろう。では、“北東(東北)アジア”が、“東アジア”のサブ・リージョンかといえ、近代においては、事実上“東アジア”の周縁化した現象がみられるが、カーナーが意図したように、ロシアの一部も「地域」のなかにふくめるために設定された場合には、異なった意義をもつこととなる。「地域」とは、論ずるものにより、いかようにもとらえうるものである。そうであるならば、“北東アジア”という空間を設定する積極的な意義とはなにか、そのことばによって、どのような状況を説明しようとしているのだろうか。

## 注

- 1) 宇野重昭編『北東アジア学創成に向けて』(浜田：島根県立大学北東アジア学創成プロジェクト、2003年)における、宇野学長による「はしがき」。
- 2) 矢野暢『冷戦と東南アジア』(中央公論社、1986年)、250頁。
- 3) この“東北(北東)アジア”をはじめとする地域概念に関して、筆者はすでに、拙稿「地域概念の政治性」、溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える [1] : 交錯するアジア』(東京大学出版会、1993年9月)、273-295頁。 ; 「“北東アジア”からみた“東アジア”」、浜下武志編『東アジア世界の地域ネットワーク (シリーズ国際交流③)』(山川出版社、1999年5月)、57-70頁、などで論じている。
- 4) 本稿に関連する、船越(押野)昭生の論考としては、「地理的認識過程よりみたロシアと北東

“北東アジア”はどのように、とらえられてきたか

- アジア」『史林』第43巻第6号（1960年11月）、1-34頁。；「ウイットセンの北東アジア地図をめぐる二三の問題」『史林』第47巻第1号（1964年1月）、112-141頁。；『北方図の歴史』（講談社：昭和51年）；『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』（法政大学出版局、1986年）を参照。
- 5) アブラハム・オルテリウス『世界の舞台』については、Colneris Koeman, *The History of Abraham Ortelius and his Theatrum Orbis Terrarum* (Lausanne: Sequoia S.A., 1964)；同書日本語訳、C. クーマン著、船越昭生監修、長谷川孝治訳『近代地図帳の誕生、アブラハム・オルテリウスと『世界の舞台』の歴史』（京都：臨川書店、平成9年）を参照。
  - 6) 拙稿、前掲「地域概念の政治性」、277-278頁を参照。
  - 7) ニコラース・ウィツェンの『北と東のタルタレイエ』、および馬場貞由による抄訳「東北韃靼諸国図誌蝦夷雜記訳説」に関しては、船越昭生、前掲「ウイットセンの北東アジア地図をめぐる二三の問題」を参照。
  - 8) ただし、ここでいう「満洲人 [あるいは満洲族] の土地」とは、のちの欧米人や日本人が地名として使った「満洲（英語形のManchuria、あるいはドイツ語形ではMandschurei）」の範囲とは異なり、今日のロシア沿海州地方がふくまれるものの、遼東半島などは除外されていた。拙稿、前掲「地域概念の政治性」、および「歴史のなかの“満洲”」『環【歴史・環境・文明】：【特集】満洲とは何だったのか』Vol. 10（2002年7月）を参照。
  - 9) Stephen Kotkin, “Robert Kerner and the Northeast Asia Seminar”, *Acta Slavica Iaponika* Tomus XV (1997), pp. 93-113.
  - 10) James Cotton, *Asian Frontier Nationalism: Owen Lattimore and American Policy Debate* (Manchester: Manchester University Press, 1989) を参照。
  - 11) ただし清水元は、第一次世界大戦後の日本では、独自の「東南アジア」という地域概念が成立していたと論じている。清水元「近代日本における「東南アジア地域」概念の成立——小・中学校地理教科書にみる——(1)・(2)」『アジア経済』第28巻第6号（1987年6月）、2-15頁；同第28巻第7号（1987年7月）、22-38頁、参照。
  - 12) 鳥居龍蔵「東北亜細亜に於ける無言貿易に就て」、初出は『人類学雑誌』第32巻第8号（1917年）；現在は『鳥居龍蔵全集』第7巻（朝日新聞社、昭和51年）、580-588頁に収録。
  - 13) 鳥居龍蔵『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』、初刊は1924年、岡書院；現在は『鳥居龍蔵全集』第8巻（朝日新聞社、昭和51年）、1-258頁に収録。
  - 14) 鳥居龍蔵『日本周囲民族の原始宗教——神話宗教の人種学的研究——』、初刊は1924年、岡書院；現在は『鳥居龍蔵全集』第7巻（朝日新聞社、昭和51年）、319-422頁に収録。
  - 15) 鳥居龍蔵『滿蒙其他の思ひ出』、初刊は1936年、岡倉書房；現在は『鳥居龍蔵全集』第12巻（朝日新聞社、昭和51年）、1-136頁に収録。
  - 16) 山本幡男『北東アジアの諸民族』（中央公論社、昭和16年）、2頁。
  - 17) 三上次男『古代東北アジア研究——東北アジア史研究第二——』（吉川弘文館、1966年）、243頁。
  - 18) 外務省百年史編纂委員会『外務省の百年』下巻（原書房、昭和44年）、765-768頁。
  - 19) 和田春樹は、朝鮮半島問題の平和的共存をめざし、あらたな「地域主義」として「東北アジア共同の家」を提唱している。氏の定義する“東北アジア”とは、「韓国、北朝鮮、中国、モンゴ

ル、ロシア、日本、アメリカを含めて考えている。……私は東北アジアを国家だけで構成されるとせず、台湾、沖縄、サハリン、クリル諸島、ハワイなどの大きな島もまた地域の第二の構成要素だとするのがよいのではないかと考えるにいたった。そうすると、東北アジアは七つの国と五つの島からなっている」(和田春樹『新地域主義宣言、東北アジア共同の家』[平凡社、2003年]、77頁)のだが、中国については、「国の主要部分が東北アジアの中に位置するが、チベット高原、タクラマカン砂漠などは地域の外である。ロシアは首都はヨーロッパ部にあり、東北アジアに属するのは極東、東シベリアの部分である。アメリカにいたっては、韓国と日本に駐留する米軍兵士10万人とハワイ、アラスカがこの地域に属すのみである」(同上書、180頁)とのべている。和田に限らず、近年の“東北(北東)アジア”に関する論者に共通しているのは、韓国・北朝鮮は完全に当該地域に入るが、中国、ロシアは領域の一部が属するにすぎないとしていることである。

なお、モンゴル国では、おおむね同国東部が“東北アジア”の経済開発問題にふかく関わっているとの認識はあるものの、国全体が当該地域に属するとは考えていない。米国は、当該地域の関係国家ではあるものの、“東北(北東)アジア”に部分的であれふくめることには、説明に無理が生ずる。さらに日本についていえば、国全体が当該地域に属するのか、部分的に属するのか、あるいは関係国家なのか、立場は論者によって一定していない。

**キーワード** 北東アジア 東北アジア Northeast Asia タルタリア図 アメリカ  
ロシア 中国 日本 モンゴル 朝鮮半島

(Tatsuo NAKAMI)